

☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!  
 ★幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!  
 ☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

# 史料ネット News Letter

第68号 2012年1月27日(金)

発行：歴史資料ネットワーク



## ▲ 歴史資料保全ネット・わかやまの活動をつたえる新聞記事

= 『朝日新聞』2012年1月13日付

### CONTENTS

- 巻頭言  
「想い」を支える資料保全の取り組み————吉原 大志(2)
- 特集 台風12号被害と  
歴史資料保全ネット・わかやまの活動————藤 隆宏(3)
- 人と防災未来センター資料室企画  
「兵庫と水害」の記録————児玉 州平・吉川 圭太(5)
- 東日本大震災 歴史資料を守る人を支援するために  
——ボランティアへの旅費助成について————添田 仁(8)
- 被災歴史資料保全活動参加記————吉川 圭太(11)
- 2011年東日本大震災被災資料救出活動支援募金ご協力の御礼————(12)

## 「想い」を支える資料保全の取り組み

吉原 大志

このたび史料ネットの運営委員を務めることになりました。史料ネットには2009年から事務局員として関わらせていただいています。その2年間に個人的に感じたことから、運営委員としての抱負を語らせていただきます。

私が史料ネットに関わるようになったその年、台風9号による豪雨水害が兵庫県内で発生しました。この水害が、私を含む現在の史料ネット若手委員の多くにとって初めての災害対応となりました。そのなかで印象的だったのが、家族の写真や区有文書の保全依頼が被災した方々から史料ネットへいくつか寄せられたことです。写真は家族にとってかけがえのない思い出の品であり、自治会長さんにとっては、自分の代で区有文書を捨ててしまうことは同じ地域に住む人たちに申し訳ない、というのが依頼の理由でした。家族写真や区有文書などは、いわゆる「文化財」ではありません。しかし、家族や地域の歴史を伝えるものである点において、かけがえのないものであるということは確かです。大きな被害に見舞われ生活復興が大変ななかでも、家族や地域の歴史を守り伝えようとする想いが確かに存在しているという事実が、強く胸に残ったのでした。

東日本大震災の被災地において、写真アルバムや卒業証書、あるいは家族の位牌を、がれきのなかから探し出し、それを保管してもとの所蔵者に返す取り組みが広く見られました。昨年9月、台風12号の被害を受けた和歌山県を私が訪れた際にも、泥かき作業に関わる方々が自発的に、泥のなかから拾い出した写真や卒業証書などを、もとの所蔵者がいつでも取りに来られるよう地域の体育館に保管していました。史料ネットにも水に濡れた写真の処置方法についての問い合わせがいくつか寄せられています。

「思い出の品だから」「地域への責任があるから」—その想いは様々ですが、守り伝える人がいてはじめて、家族や地域の歴史は現在にまで残されています。そうだとすれば、史料ネットが続ける資料保全活動は、モノとしての歴史資料だけでなく、それを現在にまで守り伝えてきた人々の想いを未来にむけて支える取り組みであると言えることができるかもしれません。

2012年となりました。今年、阪神・淡路大震災から17年、そして3月には、東日本大震災から1年、台風12号からは半年ということになります。現在も各地で多くの人々の手によって、資料保全のための取り組みが続けられています。その取り組みは歴史資料を守り伝えてきた人々の想いを支えるものでもあることを肝に命じ、身を引き締めてこれからの史料ネットの活動に関わる所存です。

(よしはら・たいし／歴史資料ネットワーク運営委員)

# 台風 12 号被害と

## 歴史資料保全ネット・わかやまの活動

藤 隆宏



### 「歴史資料保全ネット・わかやま」の立ち上げ

2011年9月2日から3日にかけて紀伊半島周辺を襲った台風12号は、日高川・熊野川・那智川・太田川・古座川などの河川を氾濫させ、和歌山県内だけで死者52人、行方不明者5人、負傷者9人、建物全壊371戸、半壊1842戸、一部破損171戸、床上浸水2680戸、床下浸水3147戸、浸水被害1592戸という甚大な被害をもたらした。

被災地における未指定文化財、民間所在資料等の保全について、和歌山市在住の歴史研究者や文化財担当者、歴史資料保存利用機関関係者の間で9月9日に会合がもたれ、これらに各職場の業務として対応できる範囲を確認し、公的に対応できない部分が多い場合にフォローする民間ボランティア団体の立ち上げを検討することとなった。

9月22日、残念ながら公的機関の対応がかなり限定的なものになることが確認され、「和歌山県豪雨被害歴史資料保全対策連絡会（歴史資料保全ネット・わかやま）」を立ち上げることとなった。和歌山大学藤本清二郎氏が代表に就任し、窓口を同大学防災研究教育センター内に設置した。のち、同大学紀州経済史文化史研究所（和大紀州研）に「豪雨被害歴史資料保全対策プロジェクト」が設置されたことを機に窓口は移り、同プロジェクトと共同で保全活動を行うこととなった。

実は、台風に先立つ8月12日、奥村弘代表をはじめとする歴史資料ネットワーク（史料ネット）メンバーが和歌山市を訪れ、地域的な歴史資料保存ネットワーク構築の必要性をオルグする懇談会が開催されていた。9月9日の最初の会合は同懇談会の出席者が中心となって行われたものである。台風被害後、団体立ち上げの決定まで20日、後に述べる最初のレスキューまでは1ヶ月を要しており、初動の遅れは猛省すべきだが、この間、経験・知識のないメンバーが史料ネットの協力を得ながら、やっとのことでこぎつけたというのが実情である。史料ネットには多大な資金援助もいただいた。史料ネットの支援がなければ、活動開始まで更に時間を要したことと思う。



### 調査・レスキュー活動

10月2日、日高川流域を対象にレスキュー活動を行った。日高川<sup>たかづお</sup>町高津尾にある中津郷土文化保存伝習館では、一階床上の61cmまで浸水し、フロアに展示していた民具資料と一部の文書資料が水に浸る被害を受けた。同館では、被災した一週間後から十数人の地元ボランティアによって復旧作業が開始されており、既に消毒などは行われ、資料は館内に収められていた。以前に和歌山県内各地で民具資料の調査を行い、現在は東日本大震災被災資料のレスキュー活動を行っている東北学院大学加藤幸治氏も参加し、民具資料の保全



についてのアドバイスを行い、史料ネットの応援部隊が被災資料のクリーニング作業を行った。



▲ 被災公文書へのエタノール噴霧

10月11日には広範囲に亘って浸水被害を受けた古座川流域の調査を行った。古座川町史編纂に文書が利用された旧家には浸水被害がなかったそうだが、被害後1ヶ月以上経過し、一般家屋の被災家財等は既に処分されていたため、民間所在資料についての現地調査はあきらめ、古座川町役場に歴史資料保全を呼びかけるチラシを回覧板等で配布することを依頼した。一方、学校など公的機関の公文書については、水損を複数箇所を確認し、学校では緊急にエタノール噴霧を行った。

10月24日、田辺市内の役場及び役場支所にチラシを配布し、田辺市本宮町と新宮市熊野川町においてレスキュー活動を行った。その際、1階が1mほど浸水した田辺市本宮行政局にあった明治期の作成とみられる地

籍図（ほぼ日本宮町域が完備されているのではないかと推定される。）の被災が確認された。被災からかなりの日数が経っているため、固着し、カビも多く発生している状態であったが、時間的な制約のため、外側にエタノールを噴霧するだけの処置を行った。また、新宮市熊野川町内の廃校となった小学校で保管されていた民具資料が、残念ながら廃棄されていたことを確認した。



▲ 和歌山大学内での乾燥

11月7日、新宮市熊野川行政局を訪れた。同行政局が所在する新宮市熊野川町日足をはじめとする熊野川流域では特に被害が大きく、多数の死者が出た。同行政局も2階まで浸水し、3階で業務を再開していた。同行政局の公文書は水損甚大のため、教育委員会関係のものを除いて全て廃棄されていた。教育委員会関係の公文書約130冊は、休・廃校となった学校関係の文書が多いようだったが、一部文書の被害が甚大で、非常な悪臭を放っていた。急遽、エタノール噴霧を行い、乾燥を促すために並べ替えた。

以上、今回の台風被害においては、かつて自治体史編纂等に文書が使用された旧家は被災を免れたが、それ以外の民間所在資料の把握、レスキューを行うことはできなかった。一方で、公文書等、公的機関の管理下にあるものの被災を多く確認したが、職員がライフライン復旧作業等に忙殺されていることにより、放置され、一部は廃棄されていることが分かった。所在が確認された公文書については、今後も定期的な確認が必要である。



### 那智勝浦町「思い出品」クリーニング作業

那智勝浦町の被災地で掘り起こされ、同町で保存されていた卒業アルバムや文集等の「思い出品」（一部仏像も含まれる）について、和紀州研が預かり、泥落とし（清掃）を行うことになり、10月22日に冊子等23点及び仏像を借用・搬送した。

10月25日にこれらのクリーニングについて、史料ネットメンバーのアドバイスを得て作業手順が確認され、10月30日から和歌山大学内で作業が始まり、同日は本会会員と学生合わせて16人が参加した。

以後、土日祝日を中心に12月30日まで、本会会員による乾燥・クリーニング（泥落とし）及び簡単な補修作業が続けられた。補修作業は、文化財修復と異なり、持ち主に再び手にとって利用してもらうことを目的として、「見栄え」

を重視した。だが、卒業アルバム等、水濡れによる固着のため、残念ながら外側の清掃以外に手の施しようのない冊子もあった。

2012年1月12日、仏像を除く、冊子等23点は、同町に返却された。

また、同日、和大紀州研は、同町内の小学校の水損公文書6冊を借用した。これらも、本会会員によりクリーニングされることになる。



▲ 「思い出品」クリーニング作業



## おわりに

初動の遅れにはじまり、本会の活動には多くの反省点がある。これらは、2月19日開催の公開フォーラムで総括され、今後の課題とされることになるが、痛感するのは、やはり従来言われてきた、事前の所在把握の重要性である。また、未指定文化財や民間所在資料の被災対策についての公的機関と民間ボランティア団体との担当範囲の線引きの難しさである。私は、今回本会が行った活動には、本来公的機関が業務として行い得たし行うべきだった領域が少なからずあると思う。行政機関の怠慢を、本会が拙いながらもフォローしたのだという認識を持っている。

水損資料のクリーニング作業等、未だ残された台風12号被害対策と平行して、将来の災害に備えた体制構築のための活動を行っていかねばならないと思っている。

(とう・たかひろ／歴史資料保全ネット・わかやま)

# 人と防災未来センター資料室企画 「兵庫と水害」の記録

児玉 州平・吉川 圭太

人と防災未来センター資料室（神戸市中央区）では、2010年度企画展「戦後神戸の歩みと阪神・淡路大震災」に続き、災害と地域形成をテーマとした展示の第二弾として企画展「兵庫と水害」（2011年7月20日～9月19日、於同センター資料室）を開催した。

また、関連企画として7月30日に「水濡れ資料応急処置ワークショップ／東日本大震災被災資料レスキュー写真展」、10月15日には公開研究会「阪神間の都市形成と水害」を開催した。

## 企画展「兵庫と水害」



▲ 5階資料室で開催した企画展「兵庫と水害」

今回の企画展では、県内の23に及ぶ個人や団体・資料所蔵機関などの協力を得て、戦前の室戸台風や阪神大水害、戦後・高度成長期の度重なる水害、阪神・淡路大震災後の1998・1999年湊川水害や2004年台風23号など、近代から現代までの兵庫県内で発生した水害を取り上げた。歴史資料ネットワーク（史料ネット）からも2004年台風23号、2009年台風9号の被害状況や資料保全活動に関する写真の提供を受けた。

この展示を通して、兵庫県の歴史がたび重なる風水害との苦闘の歴史でもあったこと、そうした災害が都市形成や開発に大きな影響を与え、また、災害への人々の対応のあり方はその時代時代によって姿を大きく変えることなどを示した。戦時体制や高度成長、震災復興、近年の自治体の大規模合併などによる地域社会の解体の進行など、その時々時代の背景・地域性にも着目しつつ、被害状況や救援・復旧のあり方、再発防止措置の状況などについて、写真パネルや資料室所蔵の災害資料（手紙やノート、新聞）などを中心に展示した。

1938年の阪神大水害を体験された方も来館され、展示資料を観ながら、当時の辛い記憶や思い出を私たちに話してくれた。今回の展示を作成するにあたって、多くの方々との新たな関係を結ぶことができた。

なお、来館者やボランティアスタッフからの会期延長を望む声もあり、10月4日より12月4日まで会場をセンター西館2階の防災未来ギャラリーに移して拡大延長した。



▲ 会場を移しての会期延長=10月4日～12月4日

## 水濡れ資料応急処置ワークショップ／東日本大震災資料レスキュー写真展



▲ 写真処置のワークショップ=7月30日

7月30日、人と防災未来センター西館1階ガイダンスルームにて「水濡れ資料応急処置ワークショップ」（主催：資料室、協力：史料ネット）と「東日本大震災被災資料レスキュー写真展」を開催した。当日は史料ネットの方々の協力を得て、講師として松下正和氏、吉原大志氏にレクチャーしてもらった。

史料ネットでは通常、古文書サンプルを使って吸水乾燥のワークショップを開催しているが、この日はそれに加え、新たな試みとして写真・ポケットアルバム・ネガの処置や図書の送風乾燥も行ってもらった。ちなみに当日用いたサンプル写真は、事前に泥水につけたり、固着させたりするなどの準備をしていたものである。

夏休みだったこともあり、当日は多くの市民の方々や子連れの家族などが参加した。松下氏と吉原氏のわかりやすい説明と、誰にでも簡単にできる処置であったため、小さなお子さんも興味深く写真を洗っていた。将来、一人でも資料の「救急救命士」になってくれる子がいれればいい。また、当日は修復工房の方や学芸員・司書の方々なども参加され、情報交換の場にもなった。



こうした水損資料の保全是、史料ネットでは2004年台風23号被害への対応からノウハウを蓄積してきたものである。大切なものが水に濡れてしまっても諦めなければ応急処置は可能なのであり、まさに今、東日本の被災地ではそうした被災資料の保全活動が日々懸命に続けられている。写真展では、史料ネット・宮城資料ネット・ふくしまネットから提供を受けた写真を70枚ほどパネルにし、被災地での取り組みを一人でも多くの方に知ってもらおうと展示した。来館された多くの方が足を止めて真剣に写真に見入っていた。



▲ 被災資料レスキュー写真展=7月30日

## 公開研究会「阪神間の都市形成と水害」



▲ 公開研究会の様子=10月15日

10月15日、人と防災未来センター東館3階演習室にて公開研究会「阪神間の都市形成と水害(戦前編)」を開催した。主催は資料室、大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会・大阪史学会近代史部会・神戸史学会・日本史研究会近現代史部会に共催してもらった。

この研究会では、吉原大志氏(日本学術振興会特別研究員)「近代神戸の水害と都市形成—湊川付け替え事業をめぐって—」、兒玉州平(人と防災未来センター震災資料専門員)「大阪の産業集積の変容と室戸台風」の2本の報告を立て、島田克彦氏(桃山学院大学准教授)にコメンテーターをお願いした。1896(明治29)年水害や1934年室戸台風といった風水害を事例に、災害が「特殊」な状態ではなく、常に起こり続けてきたものであること、その結果阪神間の都市形成にも大きな影響を与え続けてきたことが報告された。

報告終了後の討論では、フロアからも積極的な発言があり、広く一般的に災害を研究するときの視点や方法、災害の展示方法などにまで踏み込んだ議論が活発に交わされた。

また、この研究会で議論になった点も踏まえ、企画展の内容をさらに更新することができた。

資料室でのこの2年間の企画展とその関連企画で、私たちは「災害」を発生時点からスタートさせて、全てを「防災」に収斂させるのではなく、災害というものを地域の成り立ちやその時々のある社会のあり方、「地域性」や「時代性」との関連において捉えようとしてきた。今回の企画展でも、様々なご意見をいただいたが、不十分だった点や活かされなかった点が多い。資料室では今後も阪神・淡路大震災被災地に根差した資料の調査収集・保存、利活用の取り組みに励んでいきたい。

(こだま・しゅうへい/人と防災未来センター震災資料専門員)  
(よしかわ・けいた/人と防災未来センター震災資料専門員)

## 東日本大震災

# 歴史資料を守る人を支援するために

## ——ボランティアへの旅費助成について——

添田 仁

潮水を吸った古文書を真水に浸して洗い、水泳競技者用のセームタオルで吸水して、扇風機の前で乾かす。びっしりとカビが生えた和綴じの冊子に、消毒のためのエタノールをふきつけて新しい袋に詰めなおす。貼りついた2枚の写真を丁寧にはがし、1枚1枚にこびりついた泥を竹ベラでこそぎ落とす。黙々と作業をつづける彼らの姿は、防塵マスクにゴム手袋、なかにはゴーグルで目をまもる者もいる。

被災地では、ボランティアが中心になって、連日、東日本大震災で被災した歴史資料の洗浄・整理がつづけられている。



▲ 泥・カビが付着した被災資料を洗う＝2011年7月

5日、添田仁撮影

### 民間資料も守りたい

東日本大震災は、文化財にも甚大な被害をもたらした。被害地域は、東北・北関東の広い範囲に及び、瑞巖寺（宮城県）や阿弥陀堂（福島県）といった国宝級をはじめとして、その数は現在判明しているだけでも744件に及び（1/19現在）。しかし、国や地方の自治体によって手厚い保護がなされている指定文化財とは異なり、個人や地域で管理されてきた民間資料—家族のアルバムや日記帳、古文書や自治会文書、民具や石碑など—は、所有者ですら、それらの存在や価値に気づいていない場合も多く、被害実態の把握が難しいことから、事態はさらに深刻だ。

この民間資料、個人や地域にとっては、指定文化財よりも大切な存在といえる。テレビや新聞報道などで、がれきの山をかきわけて家族の写真を探す人びとや、昔の津波について刻まれた石碑の前に集まる人びとの姿を目にした方も多いのではないかと。思い出の品は被災者が立ち直る心の支えとなり、地域の歴史を記した古文書やモニュメントは、先人の記憶や教訓を現在に伝えるものとして、地域社会の再建に役立つ。今後、被災地が復興し、住民が文化的な暮らしを取り戻すために不可欠の存在だ。

いま、このような民間資料を救出・洗浄・整理・修復し、個人や地域の再生のために活用する活動が求められている。4月、文化庁は文化財等救援委員会を組織し文化財レスキュー事業を開始した。そこでは、国や地方の自治体が保護する指定文化財のみならず、未指定のものまで救済の対象としている。しかし、被災した民間資料の数は膨大である。持続的な活動を念頭におくならば、カギは、被災各地に拠点を持つ資料救援ネットワーク（以下、資料救援ネット）を紐帯とする、NPOや有志のボランティアが握っていると言ってよい。

### いま、なすべきことは何か

5月以降、何度か被災地を訪れた。泥やカビにまみれた古文書、折り重なるように積み重ねられたふすま、潰されていく土蔵、そして地道な活動を続ける資料救援ネットの面々。そのなかで考えていた。遠く離れた関西の地で、いま、われわれがなすべきことは何か・・・



第一に、人手を集めること。とりわけ、短期間で終えなければならない救出・洗浄作業の場合は、一度に多くの人数を要する。もちろん現地には文化施設関係者、郷土史団体、そして救済ネット会員も多いが、彼らも被災者であり、十分な人数を確保することは難しい。そこで、遠隔地からでも、必要な知識と技術を備えた人が、現地の活動に協力するかたちで参加しやすい環境を作ることを優先すべき、と考えた。

第二に、若い人に、被災地の歴史文化をめぐる状況を知ってもらうこと。現場での経験は、どれほど小さなことでも大きな意味を持つ。たとえば、東日本大震災では、各地に生まれた資料救援ネットが互いに様々な支援を行うなかで、多くの被災資料が救われた。このような災害に対する相互支援のネットワークが持続的に機能するために、必要なことは何か。それは、被災地の歴史文化をめぐる状況を、被災地にいなくとも自分に関係する問題として捉えることができる若い人が、全国に一人でも多くいることではないか。現地での経験が、そのきっかけになる、と考えた。

### 歴史資料を守る人を支援するために

歴史資料ネットワーク（以下、史料ネット）では、8月から、被災地での資料保全活動への参加を希望する人に対して、旅費の一部を助成する取り組みを進めている。

この取り組みは、稲盛財団（東日本大震災復興ボランティア助成制度）、ならびに企業メセナ協議会（東日本大震災 芸術・文化による復興支援ファンド「被災地の再生に向けた民間歴史資料の救出・修復プロジェクト」）からの助成金を得て実現した。

利用者については、現地の資料救援ネット（宮城、岩手、山形、茨城）が企画する被災資料の救出・洗浄・整理などへの参加を条件に、史料ネットのメーリングリストや関係諸学会を通じて公募している。応募資格は、①歴史に興味を持っている、②歴史講座・勉強会に参加した経験がある、③被災資料レスキューの経験がある、④古文書や民具等の資料を用いた指導・実習を受けた経験がある、これらのうちどれか1点を満たすことが基本となる。

これまでに、宮城歴史資料保全ネットワーク（略称、宮城資料ネット）で13日間、茨城文化財・歴史資料救済・保全史料ネットワーク準備会（略称、茨城史料ネット）で2日間、のべ15日間で21名（54人日）の参加を得た。その大半は、若い学生や非常勤の職員が占める。専門分野は、歴史学や文化財保存学だけではなく、民俗学・社会学など様々だ。

表 現地での作業一覧

| 日程              | 場所      | 参加者数 | 作業                                  |
|-----------------|---------|------|-------------------------------------|
| 2011. 8. 22-23  | 宮城資料ネット | 2    | 宮城資料ネット救出資料の洗浄・整理                   |
| 2011. 10. 25-28 | 宮城資料ネット | 7    | 宮城資料ネット救出資料の洗浄                      |
| 2011. 11. 19-20 | 茨城史料ネット | 4    | 茨城史料ネット救出資料の整理・記録                   |
| 2011. 12. 13-15 | 宮城資料ネット | 1    | 宮城資料ネット救出資料の搬出・洗浄                   |
| 2011. 12. 16-19 | 宮城資料ネット | 7    | 石巻文化センター所蔵図書資料の救出<br>宮城資料ネット救出資料の洗浄 |

### 利用者の声から

成果は、もしかすると「焼け石に水」程度のものかもしれない。実際、利用者はわずかだし、彼らによって救出・洗浄された被災資料の数も、全体から見れば微々たるものである。しかし、花を咲かせるためには、ちっぽけながらも種をまく作業が不可欠なのだ。

詳細な活動内容については、後段の吉川報告にゆずる。ここでは、助成を利用した方々の反応を、参加記からかいつまんで紹介しておきたい（以下、「」は参加記から抜粋）。

まず、「資料保全是、どこから手を付けていいのかわからず放置するというものではなく、状況を知り、どうやって今の動きに協力参加できるか」、そして「史料は単なるモノではなく、人が生きた痕跡そのものなのだ実感できた」といった、実際に被災地での活動を経験しなければ得られない感想が目立つ。また、「（被災資料レスキューへの幅広い市民の参加を知り―筆者註）歴史や文化というものが主に専門家の手に委ねられているという、現在の状態がある種異常であるということに気づかされた」、「他分野からの協働参加の垣根を低くしていただいた。そして連携の視野が広がった」といった、研究者と一般の市民の間の壁、また専門分野の枠組を越えた交流の重要性について言及した意見も見られる。

一方で、「作業を体験してみて、資料の泥落とし、クリーニング作業には膨大な時間と人手が必要だということが、身に染みて分かった」といった感想も多い。技術的な面では、むしろ現地の資料救援ネットやボランティアから学ぶことが多かったことは否めない。

このような経験を踏まえて、「大阪での予防的な活動も検討しなければならない」といった危機意識も芽生えている。



▲ 山積みになった被災資料とボランティア＝2011年10月25日、添田仁撮影

## これからが正念場

大震災は、まだ終わっていない。各地の資料救援ネットは、多くの津波被災資料をかかえている。これらは、泥落としや塩抜きのために水洗いが必要で、その作業には膨大な時間を要する。また、これから内陸部での旧家の家屋・土蔵の解体が本格化することを考えれば、今後1年間は被災資料が断続的に搬入されると予想される。写真撮影、保存用の中性紙封筒・箱への保管まで行くなれば、所蔵者への返却までの道のりは果てしない。

「ボランティアはお金をもらっていくものではない」といった声をよく耳にする。たしかに、厳密に言えばそうなるかもしれない。しかし、現状は深刻である。被災地は慢性的な人手不足に陥り、かたや遠隔地に住む若い人びとは眼前の学業や雑務に追われ、学会全体の関心もまだ低い。そのなかで「経済的な余裕があれば、被災地に行って、被災地の歴史文化を守るために、いまできることをしたい」という人が一人でもいるなら、手をさしのべる手段もあってよいだろう。

助成の利用者を見ていて感じたのは、大阪・兵庫・京都などと比べて、被災地に比較的近いはずの東京からの利用希望が少ないこと。とくに若い人が極端に少ない。こちらの広報の不手際はあろうし、もちろん他の手段で行くこともあるだろうが、人口比から考えても、正直意外だ。これが全体の縮図ではないことを祈りたい。なぜなら、被災地が文化的な生活を取り戻すまでの持続的な活動を想定したとき、今後は、より被災地に近い東京の役割が重要な意味を持つことになるのだから。

各地資料救援ネットのボランティア募集、ならびに旅費助成の案内は、史料ネットのメーリングリストで随時公表している。まずは、s-net@lit.kobe-u.ac.jpにご一報いただき、メーリングリストへの登録をお願いしたい。

（そえだ・ひとし／歴史資料ネットワーク運営委員）

# 被災歴史資料保全活動参加記

吉川 圭太

2011年10月26日から28日までの3日間、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク（以下、宮城資料ネット）事務局での被災資料クリーニングに参加した。東日本大震災の発生の後、私は何度か宮城を訪れていたが、今回は約3ヵ月ぶりのボランティア参加であった。

宮城資料ネット事務局には、すでに応急的な陰干しや送風乾燥の済んだ膨大なレスキュー資料が一時保管中であった。私が参加した10月26日からの作業は、岩手県陸前高田市で津波の被害にあった被災資料のドライクリーニングおよび洗浄作業だった。ドライクリーニングは、刷毛や竹べらなどで乾いた泥を丁寧に落としていくという地道で根気の要る作業である。

資料はほぼ乾いた状態のものが多かったが、なかには黒カビ（すすカビ）の発生によって固着し（写真1）、展開が極めて困難な資料もあった。宮城資料ネットのスタッフに伺ったところ、この資料は所蔵宅の系図とのことで、そのお宅にとって最も重要な資料である。専門家に委託すれば修復できる可能性もあるかもしれないが、そうした場合、やはりコスト面での負担がのしかかってくるという大きな課題があると強く感じた。

技術面においては、私が7月にボランティアで訪れた時よりも進んでいる点がいくつかあった。例えば、濡れた資料を送風乾燥する際にワイヤーラックを用いていることが挙げられる（写真2）。これによってスペースを節約することができるのと同時に、下からの通気も良いので乾燥しやすい。また、個々の資料の飛散防止には、園芸用ネットの他、裁断したグラスファイバー製の網戸も使っていた。これは、後述するように東京文書救援隊（以下、東文救）方式による資料洗浄で用いられているものでもある。その他、ドライクリーニングの作業台には、三辺を折り曲げて埃や泥の飛び散りを防ぐという工夫を凝らした段ボール台が使われていた（写真3）。これも東文救からアドバイスを受けたものだそうだが、さらに宮城資料ネットではボランティアの方のアイデアをもとに、真ん中で折れ曲がるようにして、溜まった埃や泥を捨てやすくする工夫を施している。このように身近な資材を使い、実際の作業を通して改良を重ね、ノウハウを構築していくという資料保全活動の現場のあり方をあらためて実感した。

また、26日は関西や東京など遠方からの参加者も多かったこともあり、作業の合間に、宮城資料ネット事務局の蝦名裕一さんによる慶長大津波に関する報告を拝聴した。宮城資料ネットでは、歴史資料の救出・保全のみならず、保全活動の一環として歴史研究を重視し、歴史研究を地域の復興や今後の防災対策に役立てるといった視点が明確に打ち出されている。

10月28日は、午後から津波被災資料の水洗い作業をおこなった。

資料の洗浄方法は東文救方式によるものである。グラスファイバー製の網戸（ネット）を資料の上に乗せ、水を張ったテンパコの中で筆や刷毛で洗うというものである。ちなみにグラスファイバー製のネットは他の素材に比べてほつれにくいというメリットがあるらしい。非専門家でも紙を傷めずに洗浄できる方法だった。なお、この東文救方式による洗浄は、一紙物の資料に適用可能だが、この日は宮城資料ネット事務局の方と一緒に、試行的に薄い冊子物の資料を処置した（写真4）。

また、東文救方式では、洗浄した資料を乾燥させる際、資料を不織布・ろ紙・段ボールでサンドし、上から重しを乗せ、送風乾燥・フラットニングさせるという「エアー・ストリーム乾燥法」を採用している。段ボールの波板の隙間から空気が流れ、短時間で乾燥できるとともに、紙のしわを伸ばすことができると聞いていたが、今回はじめてその方法を体験することができた。

私がボランティアで宮城資料ネット事務局を訪れたのは約3ヵ月ぶりのことだったが、事務局には一時保管中の被災資料が今なお山積みの状態であった。震災発生後の春や夏の段階に比べると、事務局のレスキュー出動回数は減っているらしいが、今なお月に数回はレスキューに出動しているとのことだっ



た。事務局メンバーの話では、10月に入ってからボランティア参加者が激減しているとのことである。これは新学期の開始に伴い、学生が参加しにくくなっているという要因のほか、東日本大震災への社会的な関心が早くも薄くなってきていることの表れのように思えてならない。

今回はおもにクリーニング作業をおこなったが、3日間で一時保管中の資料のうち、ごくごくわずしか処置できなかった。被災資料の保全活動といえば、すなわち「レスキュー」というイメージが強いかもしれない。もちろんレスキュー作業は現在も各地で継続されており、とくに内陸部の地震被害地域などでは家屋解体が進む中で急を要している。東北や長野は豪雪地帯も多いことから、これらのレスキュー作業は今度は冬が来るまでの時間との勝負になってくるものと思われる。だが、一方で、これまで救い出された膨大な被災資料をクリーニングや整理をしていくという息の長い作業が待ち構えていることを痛感した。津波被害地域から辛うじて救い出された資料を一点でも多くできるだけ綺麗にし、所蔵者や地元へ返し、今後の地域の復興や郷土史研究に役立ててもらうためにも、今こそ持続的な支援が求められているのであって、被災歴史資料の保全活動は新たな段階に入っていると強く感じた。

また、この間、台風12号および15号によって関西でも大きな被害が出ている。東日本大震災の被災地支援とともに、各地で頻発している災害に対して、どのように対応していくかが関西において資料保全活動に携わっている私たちに問われているものと思う。

(2011年11月6日記)

(よしかわ・けいた／歴史資料ネットワーク運営委員)



(写真1) 黒カビによって固着した資料



(写真2) ワイヤーラックでの送風



(写真3) ドライクリーニングの作業台



(写真4) 洗浄前(左)と洗浄後(右)の資料

## 2011年東日本大震災被災史料救出活動支援募金ご協力の御礼

歴史資料ネットワーク

支援者一覧 (敬称略・順不同・2011年11月1日～2012年1月10日現在)

筒井裕美子、田村憲美、三村昌司、白山史学会、松下佐知子、山崎如代、坂上康俊、石津輝真、古田えり子、千葉一孝、鄭根、坂本昇、土屋寿美恵、佐藤純子、大橋幸俊、馬場義弘、西岡芳文、岩井忠熊、岩田慎平、伊藤定良、深見貴成、保田ひで、永井市治郎、渡部桂子、遠藤美保子、宮崎県地域史研究会、坂輪宣政、谷本雅之、倉地克直、宮城県農業高等学校同窓会、カミヤシュウジ、昆野伸幸、福島幸宏、松沢裕作、末田真樹子、横山伊徳、久志本鉄也、紀藤雄一郎、前川祐一郎、能川泰治、尾島志保、大野薫、藪田貫

※岩田書院・岩田博様の「歴史系の専門書の出版社としては、現地での史料保全に役立ててほしい」とのご厚意により、2011年中の岩田書院の学会・研究会での売上金の1割を、被災史料保全への支援金としてご寄付いただいております。